

頼宝撰『真言本母集』に見られる禅籍について

千葉 正

一 はじめに

真言宗、東寺教学の基礎を築いた頼宝（二七九—一三三〇？）には、弟子の杲宝（一三〇六—一三六二）に見られるような激しい禅宗批判は見いだせない。筆者は、頼宝の著作の中から具体的に禅宗に対する言及がなされている文献について、これまで『諸法分別抄』『身心本元事』『釈摩訶衍論勘注』をとりあげて検証した。その結果『諸法分別抄』『身心本元事』においては、禅宗を「唯心」の法門と判じ、『釈摩訶衍論勘注』では『宗鏡録』からの引用が、多くなされていることが分かった。したがって、頼宝は、余り禅宗に対しては関心を持っていなかったのではないかと考えられる。しかし頼宝は、その伝記が不詳ながら、東寺の教学復興に尽くしたということは、著作のなかに「宗義決撰書」と呼ばれる文献が存在していることから分かる。そして、この「宗義決撰書」中の最も大部の著作が、本稿で取り上げる『真言本母集』全

三十四卷である。

中世東寺の復興に関して、果たした役割の大きさについては杲宝の『東宝記』の記述からも推察できる。堂塔の再建、春秋二季の伝法会の宗学制度の振興ということから明らかである。また頼宝は、後醍醐天皇から、篤い帰依を受けていたことも知られる。

本稿で取り上げる『真言本母集』は、頼宝にとって重要な文献なのであるが、内容に関してこれまで検証を行ってこなかった。したがって『真言本母集』の中に、どれ位、禅宗に関する記述があるのかを検討してみる必要があると思われる。それは、頼宝の禅宗理解の一助ともなり得るからである。本稿では、具体的に『真言本母集』中に見られる禅籍について検証していきたい。

二 頼宝の禅宗理解の一端

次に頼宝の禅宗理解に関して、以前取りあげた文献におけ

頼宝撰『真言本母集』に見られる禅籍について（千葉）

八〇

る禅宗に対する見解の一例を、ここで再度まとめてみたい。それは、前述の『諸法分別抄』『身心本元事』において、次の様な問答の問いの箇所述べてられている。

問云。顕密教法雖異。善惡作業皆以心為先導。是通例也。法相大乘依三界唯心經文。万法唯識所變為宗。三論家由八迷成緣起。以八不觀至悟入。皆是心上迷悟。法花一乘一心三觀一念三千。皆以心為根本。花嚴心如工画師造種種五陰^{云云}或三世一切物仏心造諸如來^{云云}十界種種五蘊。皆是心造法也。説楞伽經云。未達境唯心。起種種分別。達境唯心。已分別即不生。知諸法唯心。便捨塵相。由此分別息。悟平等真空^{云云}達磨一門以之為極。（大正蔵七七・七一五c—七一六a）

この問答の中で頼宝は、「顕密の教えには違いがあるが、善惡の行為（身口意の三業）は「心」が導き手となり、あらゆる行為が「心」に由っているのである」という問いを立てている。この問いの中で、頼宝は法相・三論・天台・華嚴について述べた後に「楞伽經云」として禅宗を論じている。そして「達磨一門」も「唯心」の法門であると理解していることが分かる。続けて浄土に関して、頼宝は次のように述べている。

觀無量壽經云。諸仏如來是法界身。入一切衆生心相中。是故汝等心想仏時。是心即是三十二相八十隨好。是心作仏。是心是仏。諸仏正遍智海從心想生^{云云}是善導一家以之為要。是以觀經十六想觀。皆是心法上建立也。（大正七七・七一六a）

頼宝は、浄土の教えもまた「心」を重視する法門であるとみなしている。したがって頼宝は、密教以外の顕教すべてが「唯心」の法門であるとみなしていたことが分かる。また頼宝は、前述の『釈摩訶衍論勘注』の中では、永明延寿の『宗鏡録』からの引用が、計九箇所見られる。この『宗鏡録』の中では『釈摩訶衍論』が大量に引用されていることが判明している。つまり、頼宝は『釈摩訶衍論』を理解するために必要不可欠な文献として『宗鏡録』を引用していたと言えよう。

三 『真言本母集』に見られる禅籍について

『真言本母集』とは、頼宝が著した真言宗の宗義に関する論義決択書である。全部で二百二十九条の算題がたてられ、各条が皆問答体で記述されている。東寺教学「東寺三宝」の義学は、全く本書を根幹とする。高野山の有快の『宗義決択集』、印融の『杣保隱遁鈔』、聖憲の『大疏第三重』等と、並び立つ書である。この『真言本母集』の内容を検証した結果、禅文献一冊の禅籍からの僅か一箇所のみの引用であった。それは『真言本母集』全三十四巻中の「巻第三」にたてられている「草木成仏事」という算題においてである。それは、次の様な論義である。

草木成仏歟事

問。草木非情自発心成仏可云耶。 答云云。

草木成仏条条

一。六大和合故。十界依正皆是六大所成也。若約五大者。本初仏体。約心大者。亦性徳五智也。草木等必雖不具識大。而自体即本來仏。況又具覚知功徳。豈無発心成仏之義耶。

一。法身遍法界故。自宗意大日即遍一切処身也。是故草木等又法身所遍也。一切器界皆是法身自体故。各具成仏作業。強軟輕重等。即是陰陽事業理智作用故。

一。四曼具智印故。四種曼荼羅亦名四智印。智即決斷義。印即決定義也。一切各顯現自性。開示功徳即智印義也。仍以草木等名表標幟也。此即表示内心令知他義也。約実云之。一切心識皆形体作業也。色体心用故。非情已具色形。何非仏体乎。

一。色心不二故諸顯教色無覚知。心無形相云云自宗不二智境界故。心帶形色色具慮知。一一刀剣現神通等是也。

一。淨穢器界別故。一切国土器界各有淨穢差別。淨土器界衆宝莊嚴樹林等出法音衆生利益等功徳有之。地獄器界瓦礫荆棘等令受衆生重苦等作業是也。此即草木有迷悟。随有情因果現器界差別也。

（『続真言宗全書』二一・五三頁上―下）

この「草木成仏事」という論義は、非情草木にも自ら発心修行して成仏する義があるか否かを論ずる算題である。非情成仏不成仏は、中国・日本の仏教界で盛んに論じられた問題である。中世真言宗においては「自依身成仏」と「他依身成仏」のそれぞれの立場から論じられることになる。頼宝は、この論義において草木非情でも自ら発心して成仏できるとする証拠として、以下のような教説を述べる。それは「草木成仏条条」として「六大体大」、「法身遍法界」、「四曼相大」、「色

心不二」（色は地水火風空の五大で、心は識大のこと。色心不二無碍とも言う）という真言密教教学の重要な教義を解説している。したがって頼宝は「六大体大」、「四曼相大」、「三密用大」（事業・作業）の観点から草木非情でも自ら発心して成仏できると説いている。

次に、この「草木成仏」を説いている典故として、頼宝は幾つかの経論を引用している。これらの典籍の中に、僅か一冊だけ禅籍が見いだされるのである。具体的に、その禅籍について検証する前に、他の典籍からの引用についてみてみよう。まず頼宝は「草木成仏証文」という章を立てる。その「草木成仏」を説く証文とは、次の様な経論からの引用である。

大日経五云。我即同心位^{等文}。疏十七釈此文云謂即以阿字為心^{等文}。又云遍住於支分阿字為心^{等文}。無情成仏決^{智証}云。入真如理觀^{等文}。卽字義云。法身三密入纖芥：名等持^{等文}。演義抄第十九云。無情成仏是是約性相融。以有情之性融無情相。以無情相隨性。融円有情之性故。説無情有成仏義。若無情成仏義融性之相。亦得説言諸仏衆生不成仏也。以成與不成非情与無情無二相故。法界無限故。仏体普円故。色空不二故：万法虛融故。説一成一切成也。非謂無情亦有覺性自性成仏。若許此義則能修因。無情變情情變無情便同邪見文。（『続真言宗全書』二一・五五頁上）

頼宝は「草木成仏」の証文として『大日経』の「心位」（法身大日如來の心の位相）、『大日経疏』の「阿字」、台密の円珍

頼宝撰『真言本母集』に見られる禅籍について（千葉）

八二

の『無情成仏決』で説かれる「真如」と「理観」、空海の『吽字義』で説かれる「法身三密」、澄観の『大方広仏華嚴経随疏演義鈔』で説かれる「性相融」と「万法虚融」という以上の経論の説を「草木成仏」の典故とする。この引用された箇所では、真如と万法とが全く融け合っていること、また法身大日如来の万法への遍在性が説かれている。

次に、唯一の禅籍からの引用箇所を見てみよう。同じく「草木成仏証文」としての引用である。

宗鏡録云。師曰。牆壁瓦礫無情之物並是仏心。禅客曰。与経大相違也。経曰。離牆壁瓦礫無情之物名為仏性。今云一切無情之物皆是仏心。未審心之与性為別不別。師曰。迷人即別。悟人不別。即身義云。諸頭教中以四大等。宝鑰下云。一字門含万像。四曼義云。問。大曼荼羅稱有情。吽字着云。三種世間皆是仏体等文。（『統真言宗全書』二二・五五頁上―下）

『真言本母集』で引用される、唯一の禅籍が永明延寿の『宗鏡録』からの引用なのである。そして、この『宗鏡録』からは、南陽慧忠の「無情説法」の話が引用されている。したがって頼宝は「牆壁瓦礫」にまで仏心が遍在している点を「草木成仏」の証文の一つとして、この『宗鏡録』を引用したと言える。さらに『宗鏡録』以外に、空海の『即身成仏義』、『秘蔵宝鑰』、『吽字義』、伝空海の『四種曼荼羅義』から引用がなされている。頼宝は、僅か一冊の禅籍を用いたに過ぎないが『宗鏡録』を「草木成仏」の証文として、空海の

著作とともに引用していたことは興味深い。

四 むすびにかえて

以上『真言本母集』の検証を終えて分かったことをまとめてみたい。

まず、僅か一冊の禅籍からの引用であったこと、しかも、この禅籍は永明延寿の『宗鏡録』であり、その中から南陽慧忠の「無情説法」の話が一箇所のみに引用されていたに過ぎなかったことである。そして、この「無情説法」の話は、中世真言宗において重要な論義の主題であった「草木成仏」の算題中「草木成仏証文」の一つとして引用されていたのである。したがって『真言本母集』の中で、重要な算題の一つであった「草木成仏」においての『宗鏡録』からの引用は、僅か一箇所ながら非常に重要な証文であったと言える。

〈キーワード〉 頼宝、『真言本母集』、草木成仏、『宗鏡録』、無情成仏、非情成仏

（駒澤大学仏教経済研究所研究員）